

大学生の地方への志向性と諸制約について

研究員 高木 英彰

1. 大学生の力を活かした対馬プロジェクト

当研究所が対馬市と協同して地域活性化に取り組むようになって今年度で4年目となる。昨年度の夏からは大学生の活力を通じた地方創生プロジェクトとして、これまでに計10名ほどの学生を連れて対馬市に入り、アグリパークの整備を中心に活動を行ってきた。また、時には西村周三先生を囲んでの地域座談会へのオブザーバー参加や、地元しいたけ生産企業での収穫体験および社員との交流など、地方の実情を見聞きし、体感する機会も提供した。そもそも対馬プロジェクトに呼び込んだ学生たちは、かねてより地方創生や一次産業に非常に強い関心を持つ者たちであり、その中には筆者らの活動とは独立に島おこし実践塾やインターンシップへの参加を通じて個人的に対馬の人びとと深い縁を築いている学生もいる。

彼らの対馬市での延べ滞在日数は長い学生でも20日程度であるが、深い学びを得、2～3年生であれば対馬に感謝を還元すべく具体的な取組みの議論を進めたり、4年生であれば進路を見直してみたりと、普段は東京にいながらも大いに対馬に影響を受けた生活を送っているようである。

今年度は、引き続きアグリパークの拡充に関与してもらうほか、新たに島内の高校再建

をテーマに活動する予定であり、この5月にも地区の代表者と意見を交わしたところである。対馬プロジェクトにおいては、地域との協議も含め大学生の主体性をより重視した形式で彼らの力を引き出せるよう当研究所として支援していきたいと考えている。

2. 大学生にとっての地域観と活動参加の課題点

さて、地方で大学生の力を発揮してもらうには彼らの意思や期待、都合にも当然配慮せねばならない。大学・大学生と地方の連携については現地の受入れ態勢や相互の期待のミスマッチの問題について論じられることが多い。そこで、本稿では大学生と接点を持つ立場から見えた、大学生が地域に入るにあたっての意識や抱えているハードル等について聞いたものをまとめた。

(1) 地方に対する学生の意識

地方滞在の経験があるといっても実際に移住という選択をするのはその1%程度であろうというのが直感的な筆者らの見立てであるが、機会さえあれば地方社会に飛び込みたいと考えている大学生は想像以上に多いというのが上記事業に関わった筆者の感想である。彼らはサークル活動などを通して学内外に同志ネットワークを有していることから、一定

程度の学生組織化と志向性の共有がなされると、類は友を呼ぶような状況が起きた。こうしてあたかも容易に陣容が拡大したことが潜在的な田園回帰的志向の持ち主を多く感じさせた理由かもしれない。しかし、そうして見つかると新たな学生層は小規模集団ではなかったことから、相当の確度で10年程前とは状況は異なっていると言えそうである。そのまた一方で、日常生活において地方への関心に共感してもらえる友人が傍にいないために鬱屈して過ごしているようなケースも少なからず見られる。こうした、潜在したままであったかもしれない学生まで行動に移せる機会が提示されることで社会にうねりを起こせる程度の規模になる可能性があることは十分に確認できた。

(2) 学生を取り巻く諸制約

彼らは一見自由人であるが、学業、アルバイト、サークル活動、留学など多様な活動を抱え、1週間の拘束ですら決して容易ではない。言い換えれば、魅力的な条件を提示して呼びかければ学生が集まるというものではないということである。また自由人ゆえに不都合な状況からは距離を置くことができる。絶えず彼らの関心を喚起する努力が必要となる。なお、大学教育の一環として単位認定されることが学業優先による時季の制約からの解放手段になる可能性もあるが、促進材料となるかどうかは条件に依るところである。参画のハードルが下がることによってメンバーの意識水準が下がったり活動の方向性が攪乱される懸念は、実は学生自身がよく認識している。規模の拡大にあたっては大学生の意識度を見極められる立場が必要であるし、学生にも仲間を引き入れる前の鑑定眼が求められる。

目先の問題として地方での活動の障害となるのはやはり交通費である。大学生の声として真っ先に挙がるのもこの点である。若者の世界観を地方社会に広げ、彼らの行動を促すためには、例えば彼ら世代に対する国内交通費の補助や、遠方ほど高負担となる現行の費用体系の均平化の仕組みがあると地方の状況は変わるのではないかと考えられる。

また先々のことを見ると、昨今問題視されているように奨学金の返済が将来の選択を大幅に制約している面があり、地方暮らしへの関心が高いとしても継続関与を実現できないケースは少なからずあるものとみられる。

3. 活動の継続性構築に向けて

個々の学生について言えば4年制の大学であってもゼミ活動での関与を除けば2年間を超えて遠方の地方と深くかかわり続けることは容易でないと見える。柔軟に学生の出入りができるような緩やかな組織化が必要である。また学生間のチームプレイがよいか単独ないし少人数で地域に飛び込む方式がよいかなどの得意なスタイルが異なったり、目指す方向性の細かな差異や相性の良し悪しが現れてくるなど、個性への対応が必要となるだろう。

先に述べたように地域と大学・大学生を巡っては受入れ態勢や制度について多く検討されてきたが、大学生の力を借りるには彼らの性向についてもより深く理解することが必要であるように思われる。